開院20周年を迎えて

サグラダファミリア（スペイン）

開院20周年を迎えて

医局より

医 師
河邉　史子

セント・ルカ産婦人科が開院20周年を迎える。1992年の開院の頃、私は国家試験の勉強をそろそろ始めなければと思っていた医学部６年生だった。産婦人科という選択肢はその時の私にはなかった。

セント・ルカが開院１年目を迎えるころ、私は国家試験の合格通知をもらい、北九州市の救急病院で必死に気管内挿管や心臓マッサージを覚え、いつ寝ていつ起きたかわからないような研修医生活を送っていた。セント・ルカではすでに体外受精で元気な赤ちゃんが生まれていた。その子は今年、大学に入学するという。

1996年、私が大分医大産婦人科医局に入局した年には、セント・ルカは開院４年目を迎えるところだった。何かの研修会か研究会の時に、私は後ろのほうに座っていたのだが、質問に立った宇津宮院長の後ろ姿だけを見て、なんとなく院長の背中に光が差しているように見え、先輩の先生に、「あの先生はどなたですか？」と聞き、「セント・ルカの宇津宮先生だよ。」と教えていただいたのが、今思い出すと、私の、宇津宮先生そしてセント・ルカとの出会いだった。

その後、腹腔鏡手術を勉強しに、水曜の午後、医局からセント・ルカ産婦人科に行かせてもらえるようになり、気腹針の持ち方から穿刺の基本、トラカールの入れ方、鉗子の使い方など、きめ細かく指導していただいた。また、筋腫核出や腺筋症の手術時には、院長の大きな手がとても繊細に動き、豪快かつ慎重な手術は毎回学ぶことが多かった。手術後に、コーヒーを飲みながら、当時私が受け持っていた患者の治療についての助言をいただいたり、院長が海外の学会に出席された際の写真を見せてもらいながら、学会での最新の話題を教えていただいた、あのわずかな時間が、当時の私にはとても素敵な時間だった。

私が始めたスキューバダイビングの話をしたとき、すぐに院長も忙しい中ダイビングスクールに通われ、沖縄で学会があった折、一緒に潜った海のあの透明な美しさは、素晴らしい思い出になっている。

当時から、セント・ルカで治療中の患者は、悩みやストレスを多く抱えているから、それに対して何かいい方法はないだろうかと、模索されていたことをはっきり覚えている。当時、生殖心理カウンセラーという存在はなかったので、看護師がカウンセリングの知識を学ぶ方法がないかと聞かれたが、私は何も答えられず、その後もずっと気になっていたのだった。その後私は結婚し、出産、育児で、５年ほど産科病院のパート勤務で、あまり学会にも出席しなかったため、生殖医療からは離れてしまっていたが、2006年４月から、再びセント・ルカで仕事をさせていただけるようになった。セント・ルカでは、日本で最初の生殖心理カウンセラーの上野先生が活躍されていて、「あぁ、宇津宮先生は患者のために必要なことをどんどん進めていらしたのだなぁ。」と、院長の行動力のすごさを再認識した。はるか先を見ながら、世界一の生殖医療を目指して、常に前に進んでいく姿は、医師として私のあこがれであり、目標である。

セント・ルカ産婦人科　新築内覧会にて

今年、私は医師になって20年目に入る。振り返ってみて、素晴らしい指導医に巡り合えたことは、とても幸せなことであったと思う。研修医時代、医局員時代、私は幸運なことに、どの時代にも尊敬できる先輩方がいた。思ってもいなかった産婦人科の道に進み、今の私があるのもその先輩方のおかげである。そして現在、まだまだ未熟な私を根気強く指導してくださる宇津宮先生のもとで、最先端の医療や、医師としての倫理、社会と医療のかかわりなどを学べることは本当に幸せだと思っている。臨床医と研究医の両方の視点で物事を考えなければならないことも教えていただいた。いつの日か、私も今まで教えていただいたことを誰かに伝えていかなければならないと考えている。

2010年に着工した新病院の建設も進み、病院の概要がわかり出した2011年３月、あの東日本大震災が起こった。繰り返しテレビで流れる津波の映像や、それに続く原発事故のニュースに心を痛めながらも、新病院の上棟式が無事に終わり、引越しの準備やセント・ルカセミナー、新病院披露パーティーの準備など、日常診療の傍ら目の回るような日々が過ぎた。

2011年７月、セント・ルカ産婦人科は大分駅南口に移転し、新病院での診療が始まった。大がかりな引っ越しも、スタッフ全員の協力のもと無事に終わった。セント・ルカの第二ステージである。バージョンアップした新しい施設で、やはりバージョンアップした診療ができるよう、院長と、素晴らしいスタッフのみんなと切磋琢磨しながらがんばっていきたい。

開院20周年を迎えて

心理専門相談室より

生殖心理カウンセラー
臨床心理士
上野　桂子

セント・ルカ産婦人科が開院してから20周年を迎えました。心理相談室は2001年４月に開室して11年になり、当院の歴史の中で約２分の１を共に歩んできたことになります。

心理相談室での活動は2001年からですが、セント・ルカ産婦人科では、その前から看護部を中心に患者さんの精神的なサポートに取り組んでおり、「元患者さんを囲む会」や「なんでも相談」などを行うだけでなく、患者さんの悩みについての研究結果を学会で発表していたということでした。そのような下地と伝統があったからこそ、心理相談室の必要性も十分理解して迎えていただいたのだと思います。

生殖医療の現場に心理相談室を設けている施設がまだほんの数施設しかない中、当院の心理相談室は旧病院の研究棟３階の１室から発足しました。生殖医療のことも、不妊で悩む患者さんの辛さも漠然としかわかっていない状態でこの分野の心理臨床に入らせていただき、心細い思いでいたことが思い出されます。そのような部外者を、院長先生はじめ看護部や研究室、受付など、当院の皆さんは、患者さんを支える仲間として温かく迎え、生殖医療について丁寧に教えてくださいました。院長先生や皆さんのお陰で今日まで何とか続けてこられたことに心から感謝しつつ、この11年間を振り返ってみたいと思います。

心理相談室開設当初は不妊治療を受けている患者さんの多さに驚くと共に、患者さんの抱える悩みの深さに、改めて精神的サポートの大切さを実感しました。患者さんとのお話の中から、不妊症患者さんは心理的に色々な問題を抱えていること、特に社会の中での少数派としての意識が強く、孤独感が強いことがわかってきました。また、不妊の悩みは人としての根源的な悩みであり、とても個人的で繊細な問題を含むため、人になかなか話しにくいこと、時にご夫婦の間でも口にしづらいことがあることが、より一層患者さん方を辛い思いにさせていることも明らかになってきました。心理相談室では、どのようなことでも遠慮なく安心してお話ししていただき、一人で抱え込むことのない様に支援できたら、と考えて心理相談を続けてきました。

そのような中で、同じ治療を受けている人と話したいという思いを持っている患者さんが多くおられました。特に40歳以上の加齢患者さんは、少数派の中の少数派としてより孤独感が強く、何でも話せる仲間が必要だと思われました。このようなことから2001年11月に40歳以上の患者さんを対象とした「オリーブの会」が発足しました。この会は患者さんの孤独感の軽減、不安の緩和、仲間意識の形成、治療意欲の増進などの効果が認められています。また、治療終結を考える際や、治療後の生活設計についてもお互いに話し合える関係ができていたようです。その後、毎年新メンバーで構成した会を立ち上げ、今年は第８期を開始する予定です。

また、このオリーブの会の取り組みの中で治療を終結しなければならない患者さんの悩みの深さに触れ、この時期の患者さんのサポートの重要性がより鮮明になってきました。治療がなかなか実を結ばず、年齢的な限界や、その他、体力的、精神的、経済的、今後の生活設計などの理由により治療終結を考えなければならなくなった患者さんの苦悩は、計り知れないものであると思われます。治療終結の決断は大変難しく、人それぞれの生き方、価値観が大きく問われる人生の危機と捉えられます。院長先生を始め、治療に携わる私たちスタッフは、その危機におけるサポートを重要な課題として捉え、患者さん方が少しでも悔いの残らない治療終結が迎えられるようにと考えて「ご夫婦二人だけの人生を選ばれた元患者さんを囲む会」を2004年に開催しました。参加した患者さん方からも治療終結に対する様々な思いや感想が出され、

患者さんから「終結を考える際の参考になった」とのご意見をいただきました。この会はその後1年に1回開催することとなり、今も続いています。

2001年に心理相談室が開設されて11年が過ぎた今、患者さんを取り巻く状況も少しずつ変わってきたように思います。

衆議院議員の野田聖子さんが2005年に自分の不妊治療体験を書いた本を出版し、マスコミなどにも取り上げられて、不妊に悩む女性の苦悩についての理解を広めるきっかけとなりました。同じ年、不妊に悩む当事者同士で作る全国的規模のピアサポートグループFineが本格的に活動を始め、様々なところで積極的に自分たちの思いを発信するようになってきました。また、最近では有名人が次々と不妊体験をブログなどで公にし、多くの人の目に触れるようになっています。これまで少数派として孤立し、どちらかというと黙って耐えるという感のあった不妊症患者さんが、自分たちの思いを社会に向けて主張できるような環境が整ってきて、随分オープンなものとなり、体験したことのない方たちの理解も以前に比べて進んできていると思われます。

また、非配偶者間生殖医療を話題にすることがタブーではなくなり、従来から行われてきた提供精子による人工授精に加えて、卵子提供や代理出産も、海外だけでなく国内でも実施されるようになってきたことも大きな変化として挙げられると思います。当院では非配偶者間生殖医療は行っていませんが、当院も登録しているJISARTでは倫理委員会を設け、厳しい審査を行った後に提供卵子での体外受精が5施設によって実施されています。私もその倫理委員会の特別委員として審議に参加させていただき、昨年からは生まれてきた子ども達とその家族に対するフォローアップ部会にも委員長として参加させていただいていますが、患者さんや生まれてくる子ども達にとって、本当に受けて良かったと思える治療にしていかなければならないと責任の重さを痛感しています。

当院の心理相談室で日々患者さんと接していても、患者さんを取り巻く状況や気持ちの面での変化を感じることも多いのですが、やはり患者さん方は自分達夫婦二人の子どもが欲しいという希望を持って頑張っておられますし、周囲の理解が得られず苦しんでおられる方、ご主人との関係や先の見えない不安で悩んでおられる方も数多くいらっしゃいます。

このような方々のために、昨年7月に移転した新病院では、心理相談室もより快適な空間となりました。患者さん方が辛い時、温かく、ほっとくつろげる相談室でありたいと思います。そしてこれからも患者さんが安心して治療を受けていただけるよう、この治療が夫婦の絆をより強く結びなおす機会となりますよう、子どもがいても、いなくても続く人生を考える場として、今後も患者さんの心に寄り添う相談室でありたいと思っています。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

セント・ルカ心理カウンセリングルーム

開院20周年を迎えて

看護部より

師 長
後藤　裕子

私がセント・ルカ産婦人科に入職したのは2006年４月、桜の花が開花する季節でした。思えばその日は「赤ちゃん～今ならきっと授かる～講座」、そして春の恒例行事の「お花見」が行われたとても忙しい一日でした。あれから６年の歳月が流れ、いろんな事がありましたが、それもついこのあいだの事のように感じられます。私の勤務歴は６年とまだ短いのですが、セント・ルカ産婦人科は今年で開院20周年を迎え、生殖補助医療の歴史も20年となりました。

過去に発行した年報などで歴史を辿ってみると、体外受精の成功から受精卵の凍結技術、着床前診断、卵子凍結の技術などさまざまな事が行われ、これは昨年も述べましたが、20年間携わった方々の英知の積み重ねに他なりません。

1992年に生殖医療の専門の施設として開院して以来、日々の診療はもちろんのこと、教育・研究を重ね、最先端のレベルで効率よく産婦人科の医療を提供し続けていくことを念頭に置いて日々業務を行っています。開院当初より、生殖医療の質の向上を挙げ、チーム医療としてその目標に近づくべく努力を続けていると思います。

1993年から始まった全部署参加による全体ミーティングは、院長の治療方針がダイレクトに伝わり、結束力の源になったと考えます。また、生殖医療において医学・技術面は著しい進歩を続けていましたが、患者さんサイドの目線で考えると、経済面でのサポート、そして心理面でのサポートの遅れは誰もが感じるところでした。保険適用に向けて全国の不妊治療施設に呼びかけ、署名運動もこの頃から始めました。徐々に運動の広がりをみせ、５回の国会請願を果たした結果、治療費に助成金が交付されるまでにこぎつけました。

心理面では、2001年から心理部門を立ち上げ、臨床心理士の上野による心理面での支援体制が整いました。患者さんにとって治療継続の大きな力になっていると思います。現在では、大きく変化する社会状況、日々進歩する医療のなかで、治療を受ける患者さんと、それをサポートする我々スタッフには、時にさまざまなジレンマを伴います。そこで、2007年からは日本生殖医療心理カウンセリング学会による「生殖医療相談士（不妊コンサルタント）養成」が始まったと共に、当院からも受講を始め、現在では看護師３名と胚培養士２名が資格を取得しています。この年に心理相談室と看護部の共同研究で発表した「初診患者さんに対するCMIを用いた健康調査」では、初診の時に心身の不調を強く自覚している患者さんは、治療を早期にやめる方が多いことや、心身の健康状態に関わらず、治療を途中でやめる患者さんは、初診から半年以内にやめる方が大変多いことがわかり、治療初期の患者さんのサポートが重要であることがわかりました。それまでは、治療の難しい患者さんに重点的にサポートを置きがちでしたが、治療歴の浅い患者さんにも心を配り、サポートを提供していく必要性を認識し、それ以降から現在まで体制を整えています。また、資格を取得したスタッフは、毎年開催される日本生殖医療心理カウンセリング学会・継続研修に参加し、スキルアップを図っています。

医療・技術が日々進歩していく中、日々の業務を行うだけでは、患者さんのサポート・心のケア・夢の実現には結びつかないため、培養室スタッフに続き、看護部でも近年日本各地で開催される日本生殖医学会、日本受精着床学会、医師会医学会、周産期研究会、そして時には海外の学会に参加し、生殖補助医療の最先端技術や心理面を学び、吸収し、業務に還元しています。現在では、各学会で２～３題発表させていただき、海外の学会でもポスター発表をさせていただける機会もあり、少しずつ成長しています。

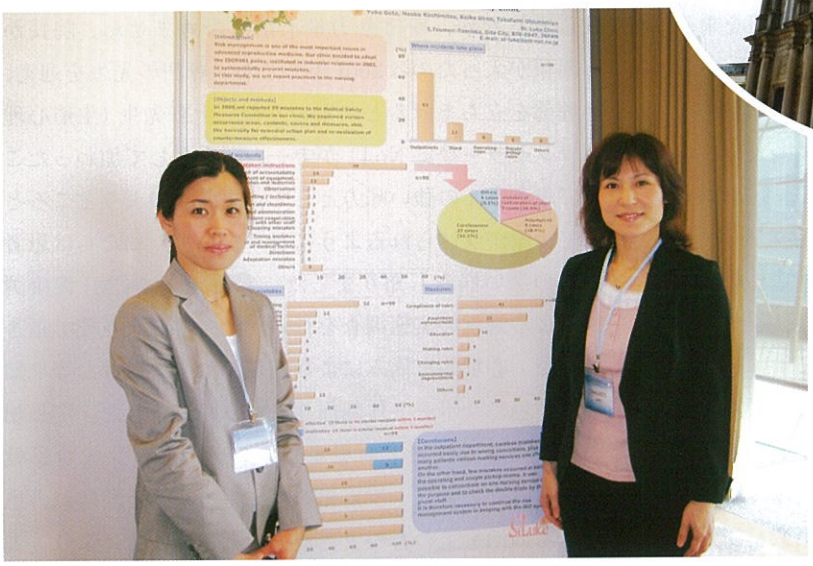
そして生殖医療の質の向上に忘れてならないのは安全性です。当院は2005年２月にJISART（日本生殖補助医

療標準化機関）でのRTAC（生殖技術認定委員会）審査に合格し、その年の7月にはISO9001（国際標準化機構）認証取得を果たしました。当院の品質目標を「患者さんの夢の実現のため、知識と技術と心を提供する」と定め、職員一同目標達成に近づくよう努力を重ねてきました。これもまた院長のもとでの結束の力と言えます。

近年では、生殖医療の進歩により、さまざまな問題が生じています。非配偶者間生殖医療で生まれた子どもたちの問題が大きいと思われます。我々看護師も、治療を受けた患者さんから生まれた児への関わりへと、次の世代にまで目を向けていく必要性を常に感じています。生殖医療に携わる一員として、やはり、治療を受けた方が、「治療を受けてよかった」「生んでよかった」、そして、その子どもたちが、「生まれてきてよかった」と思える社会の実現化に向けての努力をして行かなければと思っています。

2011年7月に当院は新しい地、大分駅南口（上野の森口）に移転しました。新たな目標を掲げ、患者さんの夢の実現のために、より一層の努力を重ねて行きたいと思います。

セントポール天主堂（マカオ）



第8回 Pacific Rim（2011年・香港）

開院20周年を迎えて

看護部より

顧 問
指山　実千代

開院は1992年６月３日、不安と喜びの一日でしたので忘れません。そして３ヵ月後の９月に、待望の体外受精での妊娠が成立したこの日も忘れられません。

スタッフ全員が外来の超音波のある一点を固唾をのんで見つめた日の事です。嬉しくて泣きそうになった顔が浮かんできます。あれから20年の歳月を迎えようとしています。人の生涯に一度は脂の乗り切った時期があるとするならば、まさに、セント・ルカ産婦人科で院長の下、生殖医療に携わったこの20年間が脂の乗り切った歳月だと言えます。そしてみなさんに支えられ生かされた歳月だったとも言えます。私は御蔭さまで２年前に退職し、現在は看護部の顧問として主に午前中をメインに働いています。

20年間を振り返ってみました。

激動とも言える20年間は、無からの出発でしたので基礎造りに奔走した時代とも言えます。大分県下で初の生殖医療専門施設として社会に及ぼす責任は重大でした。どこを見ても厚い壁だらけの状態を、院長は見事な統率力で私たちスタッフを導いて下さり、難問一つ一つに挑戦し続けました。ひたむきな努力が幾多の壁を乗り越え今があるのだと明言できます。

まず「不妊治療を社会に知ってもらう」という思いで、情報の提供から始めました。コンパルホール、大分文化会館、ホテル「くれべ」等で「赤ちゃんが欲しい」講座を重ね、不妊治療を受けてみようとする患者さんや家族、そして広く世間に向けて広報する事に懸命でした。現在は、「赤ちゃん～今ならきっと授かる～」講座として、トキハ会館での年４回の開催が定着しています。

また、当院での仕事を正確に整理するため情報処理部門を立ち上げたのは、生殖医療施設ではセント・ルカが最初だったと記憶します。外来数・入院数・手術の内容・妊娠数・流産率・ART 妊娠・ART による出産及び児の状況・学会発表等を年報としてまとめ、関係施設へお届けして広報に力を注ぎました。この事は生殖医療の正当性、安全性の裏付けに大いに役立ったと思います。この年報も継続中です。

学会発表も情報提供の一貫でした。開院２年後には、大分市医師会医学会での発表を皮切りに、以後18年間毎年発表を続けています。院長の治療方針が揺るぎなく継続されている証だと思います。日本生殖医学会九州支部会に看護部として発表の機会を下さったのも院長でした。医学会での看護部門の発表は存在していない時代でしたので、とにかく新鮮でした。生殖医療は医師のみの医療でなくチームとして支える必要があると力説されていましたから、院長としては当然の事だったと思えます。

医術面では目を見張る程の早さで進歩を続けました。しかし、治療を受ける側の視点で捉えると、受ける人の心が置いてきぼりでした。心が充実されなければ治療の継続は難しく妊娠につながりません。開院５年目頃より心理面でのサポートが必要だと実感しました。看護師での心のサポートは患者さんにとって満足が得られるものではないと考え、心理専門の講師の先生の講義も計画実践しましたが、やはり力量不足は否めません。院長から朗報が入ったのは2001年でした。専門の先生を迎え、心理部を立ち上げるとの事でした。上野先生（生殖心理カウンセラー登録 No.1）がチーム医療として加わったことで患者さんの強い味方として、また心のよりどころとして治療が受けられるようになりました。私たちは患者さんの深い悩みも知りました。看護部では CMI 健康調査による悩みの実態調査を行い、学会で発表させて頂きました。心理的な悩みにより病院で治療を受けた等を知り、早急にサポート体制作りに取り組みました。院長相談・なんでも相談・新患オリエンテーション・新患教室・体外受精教室・ラボ相談等に力を注ぐと同時に、患者さんの治療上の心の支えが夫であったことにより、夫婦揃っての教室参加への呼びかけも強化し、今では「夫

職員旅行（2009年・北海道）

婦揃って」は当院の治療方針となっています。

とにかく生殖医療を進めていく上での問題は山積みで、経済的サポートも必要な事でした。院長はいち早く保険適用に向けての署名運動を始め、全国の専門施設にも保険適用の呼びかけを実施し続け、５回の国会請願を果たした結果、助成金が交付されるまでに運動を広げ、政治をも動かしたのです。

次に患者さんの不安から考えると、安心して治療を受けられるという管理体制が必要となります。2003年にJISART（日本生殖補助医療標準化機関）を立ち上げ、2005年にISO9001（国際標準化機構）認証取得を果たし、安全性の提供にも力を注ぎました。取得後１～２年はWチェック等もなんとなく実践して噛み合っていない感じでしたが、序々に「本当に必要なもの」として患者さんの為、病院の為、そして自分自身の為に実践されつつあります。これからはもっと何のために実践しているのかの危機感を持ち、責任を果たしていく姿勢を継続し続けたいと思います。

生殖医療の医学・技術の研究だけにとどまらず多岐に渡り情熱を注ぎ続けた院長の強さは、どこから湧きあがるのだろうと思ってしまいます。おそらく神様だと思います。

思えば開院当初の無からの出発は本当に大変でしたが、それ以上に充実感や達成感で一杯でした。ひとつ乗り越えれば次の問題が立ちはだかります。でも怯むことなく、進んでまいりました。院長という力強い牽引者がいなければ達成できません。今は全てが何事もない普通の業務としてこなされている事が、実は立ち上げの時代は、苦労の連続の日々だった事を知っているのは、院長先生と事務長の奥様と、その下で働かせて頂いた私くらいしかいないのだなと思ったりもしています。目指した方向に進んで来た事に間違いはなかったと院長は話されました。私も今安堵しています。若い力が次の時代を引き継ぎ頑張ってくれていますから。

開院19年目の2011年７月に、セント・ルカ産婦人科は大分駅南口（上野の森口）すぐ近くに移転しました。大分駅が全面高架され新しく生まれ変わり、駅の南口は文化・経済の地として大分市の歴史を築き始める事と思います。同時にセント・ルカも新たに歴史を築き始めました。何だか気持ちがわくわくしてきます。新しい地でのセント・ルカは、大分県の生殖医療を担い、多くの患者さんの夢である「我が子を抱く喜び」の実現に向かって再度歩み始めました。私たちも身の引き締まる思いで一杯です。

第26回 日本受精着床学会（福岡）にて

開院20周年を迎えて

研究室・培養室より

室 長
大津　英子

20周年を迎えて、あらためて研究室の歩みを読み返しました。1992年10月に体外受精の初妊娠の記述があり、以後さまざまな新しい技術での妊娠が報告されています。先輩がたの苦労と喜びはいかほどであったか、想像に難くありません。輝かしい臨床成績を上げる傍ら、1993年より学会発表の記述があり、私が入職した1999年1月には生殖医療研究所実験室運用開始という文字がありました。私はセント・ルカに入職するまで、大学の授業や生命科学の本などを通じて、自然現象や生命に関してのほとんどのことが解明されており、人の英知はなんとすばらしいのだろうと思っていました。しかし入職以来、こんなにもまだわからないことが残されているのだと驚きの連続でした。1990年代後半の世間では、ヒトゲノムをすべて解析するというヒトゲノム計画が推し進められる中、すべて解析されれば医療は飛躍的に発展するのであろうと、知識がなかった私は本気で夢想していました。しかし実際は、塩基の配列がわかったに過ぎませんでした。培養室の現場では、顕微授精をしても受精しないのはなぜか、それさえわからないのです。日常業務を行いながら、膨大な疑問と向き合ってきた20年であったと思います。前述の疑問は、スタッフの一人が向き合い、『体外受精における非受精卵の前核形成阻害の解析』という演題にて、第45回日本哺乳動物卵子学会の学術奨励賞を受賞しました。また、形態の良い胚が本当に良い胚であるのか、という疑問には『選択的単一胚移植（e-SET）におけるday 3胚の呼吸量測定の試み』という演題にて第51回日本哺乳動物卵子学会学術奨励賞を受賞しました。森崇英先生[*1]、阿部宏之先生[*2]、有馬隆博先生[*3]、荒木康久先生[*4]をはじめとする、たくさんのすばらしい先生方のご指導の下、近年では国際学会も含め年間約20題の演題を発表するまでになりました。特に2008年11月には、第64回アメリカ生殖医学会（ASRM）にて、950のポスター発表の中から優秀賞に選ばれました。

一方で開院以来、患者さんに寄り添った研究室であれとの院長の思いは貫かれ、日本で一番患者さんに近い研究室になったのではないかと自負しています。IVF周期に入る前の説明、IVFの結果説明を研究室スタッフが行うのは他施設でもあるようですが、腹腔鏡手術のカメラ持ち助手を行ったことのある培養士は他施設ではいないのではないでしょうか。それは、配偶子や受精卵が、いかに患者さんの思いの詰まったものであるか、培養士にとって一番大事なことを教えてくれます。2008年には培養室スタッフから生殖医療相談士が誕生しました。先日、「培養士さんにも赤ちゃんを見せたい。」と、当院を卒業された患者さんから、わざわざ声をかけていただきました。最初は、患者さんのお顔に覚えはなかったのですが、お話を聞くうちに、相談内容などがありありと思い出され、移植した胚が脳裏に浮かびました。「あのときの、6分割ちゃん！」と患者さんと手を取り合って喜ぶことができました。

2011年7月には新病院が開院となり、エアシャワーや外部フィルターの導入によりクリーンルームの環境もより一層良いものとなりましたが、もうひとつの変化は

第45回 日本哺乳動物卵子学会学術奨励賞受賞

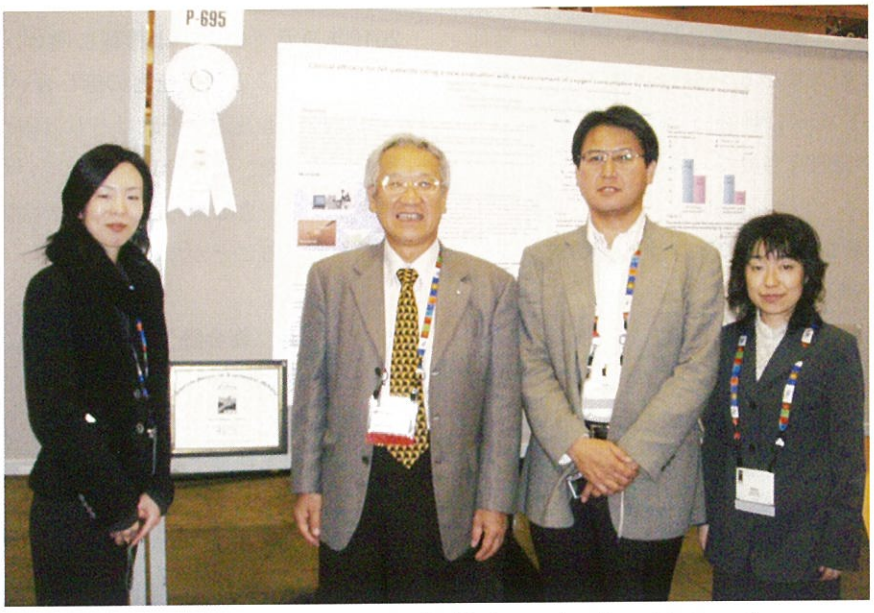
廊下からクリーンルームを撮影

クリーンルームに大きなガラス窓が設置されたことです。そのためクリーンルーム内を、患者さんにいつでも見ていただけるようになりました。採卵中に、心配そうに培養室を覗き込む男性に、心の中で『大事に育てるからね』とつぶやき、目を皿のようにして卵子を探しています。

ヒトゲノム計画は、現在一歩進み、様々な生命現象の一つ一つと結びつける作業に入ったようです。わからないことはまだまだ恐ろしいほどに私たちの前に立ちはだかりますが、患者さんの気持ちをエネルギーに、未熟卵の体外成熟培養での初妊娠・初出産、着床前診断での初妊娠・初出産と一歩一歩進んできたことが実を結ぶのを見ることができました。

これからも、配偶子や受精卵を扱う際には背後に患者さんご夫婦の馳せる思いを感じ、手技の一挙一動作、一判断の重みを感じながら、ラボスタッフ一丸となって日々励んでいきたいと思います。

＊1　京都大学 名誉教授、
　　ＮＰＯ法人生殖再生医学アカデミア 理事長
＊2　山形大学大学院理工学研究科 教授
＊3　東北大学大学院医学系研究科 教授
＊4　高度生殖医療技術研究所 所長



第64回アメリカ生殖医学会優秀賞受賞（2008年・サンフランシスコ）

開院20周年を迎えて

受付より

部 長
越名　久美

セント・ルカ産婦人科が開院して20周年を迎えました。早いもので私も入職してから17年が経とうとしています。受付も、この20年で大きく変わりました。15周年誌作成時に15年を振り返りましたので、今回はこの5年間（ルカ20年の内、一番変化の大きい5年間だと思います）を振り返ってみようと思います。

2007年４月：JISART 施設認定更新審査（JISART RTAC）

この審査より受付が審査対象に入りました。私にとって初めての審査であり、JISART RTAC にとっても初めての日本人審査員による審査でした。過去の審査を振り返ることができず、試行錯誤し、手さぐりの状態での大変な審査となりました。

2008年６月：JISART 第１回事務部門教育セミナー・第６回 JISART シンポジウム

私にとって初めての部門別教育を受ける機会となりました。同じ不妊治療の分野で、他施設の方との交流が今まであまりなかった私にとっては、とても新鮮で、発見が多々あり、今までの業務を考えさせられました。ディスカッションでは、「安全管理委員会報告について」という内容で初めての発表をさせていただきました。

2008年 10月：診療報酬明細書のオンライン請求システムを導入

オンライン請求のメリットといえば、まず支払基金の受付時間の延長です。土・日・祝日を含め21時まで請求が可能となりました。最大のメリットは、レセプトの事前チェックが可能になったことです。オンライン請求ソフトの事前チェック機能により、不備等のある請求データを事前に洗い出せるようになり、返戻レセプトが最小限におさえられるようになりました。また、紙レセプト搬送のために、業務中に受付スタッフを外出させることもなくなり、業務への負担が軽減されました。導入以来、特に大きなトラブルもなく、スムーズに業務が行えています。

2009年７月：院長から突然の爆弾発言

大分駅南口に病院を移転するとの事で、予想していなかった事でしたので、スタッフ一同それは驚きました。その後は、福岡山王病院へ施設見学に行かせていただいたり、予約システム導入に向けて大分市内の産婦人科を見学させていただいたりと、移転の準備に追われました。

2010年１月：女医の河邉先生が常勤へ

月・水・金曜日の13：30～15：30まで、一般不妊治療・思春期・更年期・婦人科外来の患者さんを対象に外来診療が始まりました。この時間は、気持ち的にゆっくりした時間が流れます。河邉先生の優しい診察が好評で、現在では予約で溢れかえっています。

2010年９月：いよいよ移転に向け、各部署の建設委員と設計士との話し合い開始

何時間にも及ぶ、それはそれは細かな話し合いが毎週行われました。話し合いを重ねていく中で、部署を越えスタッフが一丸となって、一つの病院を作り上げていく喜びを感じることができました。

2011年３月：新会計システムを導入

会計で患者さんをお待たせしないため、３台同時稼働ができるようになりました。また、手計算で行っていた処理がデータ管理できるようになり、本当に素晴らしいシステムが出来上がったと思います。

2011年６月22日、23日：いよいよ病院引っ越し

１日目の朝、院長、スタッフ全員が多目的ホールに集

まり、みんなと『頑張るぞ！！』と意気込んだワクワクした気持ちは、一生忘れないと思います。それと同時に、旧ルカで過ごした17年間、色々な事を経験し、学び、成長させていただいた場でしたので、旧ルカから荷物が次々と運び出されていく寂しい気持ちも一生忘れないと思います。

2011年７月１日：新病院開院

開院に向けて全国の先生方、たくさんの方々からお祝いのお花を頂きました。ありがとうございました。吹き抜けの解放感ある待合室が、お祝いで頂いたたくさんの胡蝶蘭で埋め尽くされました。新病院に一歩足を踏み入れた患者さんの涙ぐむ顔、「とても、素敵ですね。」とたくさんの患者さんから言われた言葉、笑顔はとても嬉しい一瞬でした。

開院と同時に予約システムも導入しました。患者さんの待ち時間の短縮、スタッフが来院患者さんの診療内容をより早く把握できるようになり、今では業務がスムーズに行えています。

昨年11月から新人が入職し、受付スタッフは４人から５人体制になりました。新人教育を強化し、少しでも早く一人前に成長させ、スムーズに業務が行える事、そして病院が新しくなり受付・待合室が拡大された事により管理範囲も広がり、受付スタッフもそれに見合うようスキルアップをしなければなりません。新病院に負けないよう、そして患者さんが安心して受診していただけるよう、受付スタッフひとりひとりを磨き上げていくことが、私の課題です。そして、2013年夏には日本受精着床学会学術講演会が別府市で開催予定です。今年は準備が大変だと思いますが、この大きな学会を目標に、多施設から情報を得、他部門と連携をとりながら益々頑張りたいと思います。

最後に、過去５年分（2007～2011年）の不妊治療助成金の総件数をご報告いたします。

	人　数	申請回数	助成金額
大　分　県	465	777	94,174,700
大　分　市	991	1,537	261,390,000
他　　県	33	48	5,765,400
県と市両方	229	268	44,601,200
大分市以外	25	27	1,736,600
市町村のみ	2	2	200,000
合　計	1,745	2,659	407,867,900

開院20周年を迎えて

情報処理室より

部 長
工藤　由香

昨年の春、多目的ホールから見える素晴らしい桜を眺めつつ、新病院移転に向けて熱い議論が交わされていたのがとても昔の事のように思えます。旧セント・ルカ産婦人科３Ｆの廊下にずらりと積みあがった大量のダンボール、職員全員が戸惑い、新しい施設での業務に対する不安を抱きながらも、大きな期待と夢に満ちた表情で汗を流し、それぞれの立場、業務は違うけれど、全員が同じ目標に向かって進みました。

情報処理室３名は、「会計システム」「予約システム」「SarahBase」の３つのシステムを不具合なく導入するために、１人１システムを担当して、各部署の担当者と実際の業務を想定し、イレギュラーな事態がある事を前提におき、そのような事態に遭遇した場合を考え、入念な打合せ、複数パターンのテストを行い、万全の体制で導入作業を行いました。それでも実際に業務が始まってみると、自分達の想像を遥かに超える事態の発生や、動線の変化によるシステム変更等様々な難題にも直面することとなりました。この経験により、また１つ情報処理室スタッフとしてのステップを踏めたのではないかと感じています。

私が入職した当時（12年前）、その頃は１名の常勤職員と、受付と兼任職員の1.5人体制で、院内のパソコン端末数は数える程しかなく、情報処理室にも、担当者用のWindows端末２台と、Mac端末が１台、インターネット用のノートPCが１台しかなく、院内データの入力のほとんどを情報処理室で行っていました。

データ入力を行うために、現場でペーパーに転記してもらい、それを入力するのですが、医療知識があるわけでもない私達に転記ミス等の発見はとても難しく、産科婦人科用語集・用語解説集（日本産科婦人科学会編）を手元に置き、用語集や辞書を引きながら、カルテを確認しつつ慎重に入力処理を行っていました。（今でも情報処理室は「医療知識は聞くより前にまず調べる」という考えのもと、新入職員が入職したら、まず自費にて産科婦人科用語集・用語解説集（日本産科婦人科学会編）を購入してもらい、カルテを見ながら「自分で引いて覚える」事を続けています。）

年報作成も、常に入力内容が進化していたため、統計・集計方法にマニュアルがあるわけでもなく、内藤多恵先輩（この先輩がいたからこそ、ストイックにデータに向き合う事ができるようになりました。心から尊敬しています。）に指導を仰ぎながら、２人でディスカッションを重ねて、マニュアル化に向け試行錯誤を繰り返してきました。SarahBase改変時に大きな力となってくださった株式会社ライジンシャの大場好高氏のおかげで、SarahBase統計解析ツールに履歴を残せる事となり、それまでは自分が行った処理を全て手書きで何十ページと記載して残さなくてはならなかったものが、その必要がなくなり、年報作成用統計処理のマニュアル化に大きく貢献してくれました。現在ではマニュアルもほぼ確立されて、新人が入っても正しい年報データを簡単に出す事ができるまでになっています。しかし、正確なマニュアルがあるため、素人でも考えなくてもできるというメリットがある反面、「考えない」「応用ができなくなる」「マニュアルのある集計・統計以外はできない」かもしれないという大きなデメリットを抱える事になりました。

当院で開発したデータベースソフト「SarahBase」は、私達が研究を行い学会発表を行う上で不可欠なアプリケーションだと信じていますが、使いこなせなくては単なるディスク上の不要なデータにしかすぎません。一方向からではなく、多方向からアプローチできる、固定概念にとらわれないアイデアを出す事のできる実力を養う事、院長がよくおっしゃる「センス」を磨く事、これが今の情報処理室に求められている事だと感じています。

1997年に情報処理室が開室し、15年が過ぎようとしています。少ない端末・1.5人という限られたスタッフで院内のデータをコツコツと整理しつつ、院長秘書業務

を細々とさせていただいていた情報処理室ですが、現在では、スタッフ３名にサーバー室完備の環境の中、サーバー３台(予約システム含む)、端末53台を完備、バーコード化を確立し、データは全て発生した場所で担当者が入力するという、理想のデータベース管理環境も整いました。私達の努力だけではとてもこの急成長に耐えられはしなかったと思います。全部署で入力を行えるまでに根気強く指導してくださった各部署の先輩方のおかげと心から感謝しています。

セント・ルカ産婦人科の高度成長期の波に乗るように、この15年で情報処理室は大きく成長したと思っています。

2005年に日本受精着床学会が行った、平成９年分（１月１日～12月31日）実施の生殖補助医療による出生児の生後発育に関する調査では、データ解析という大役を仰せつかり、その時の日本受精着床学会理事長であられた故中村幸雄先生、京都大学名誉教授 森崇英先生がそれぞれ素晴らしい論文にまとめられ、その中に謝辞までいただきまして、本当に難しく大変な事業でしたが、私の心に深く残る仕事をさせていただき、大きなステップを踏ませていただきました。

そして現在では、厚生労働科学研究費補助金成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業「生殖補助医療により生まれた児の長期予後の検証と生殖補助医療技術の標準化に関する研究」の ART 出生児のコホート抽出・発育・発達調査体制の構築部分の分担研究者である院長のお手伝いをさせていただけるまでになり、研究代表者である慶應義塾大学教授 吉村泰典先生、ご担当の久慈直昭先生や JISART 会員の先生・ご担当の皆さんとのやり取りを通じて、多くの学びを与えていただき、貴重な経験をたくさん積ませていただいています。

クリニックベースでの情報処理室開設はまだまだ少なく、他施設との交流も勉強会も持てない状況の中、この２つの大きな事業への協力は、私達にとって素晴らしい経験であり、自分達の業務に対する大きな自信に繋がりました。科研費を使用した児の予後調査に関しては、今後も継続される調査であり、2011年度に生まれた児が小学校に入学するまで根気強く続けられる事業ですので、院長の指示の下、スタッフ３名力を合わせてスムーズな調査が行われるよう最大限の努力をしていきたいと考えております。

2013年の夏には、当地におきまして院長が大会長を務めさせていただきます、第31回日本受精着床学会総会・学術集会が開催されます。例年、開院記念行事として開催しているセント・ルカセミナーの事務局業務を行っていますが、30倍以上の規模となり、不安で圧し潰されそうにもなりますが、スタッフ全員と手を取り合い、助け合いながら、院長から与えられた業務をこなしていけるよう、情報処理室がセント・ルカ産婦人科の屋台骨となれるよう務めていきたいと考えております。

2012年、桜の美しい季節も過ぎ、晴れ着というわけではありませんが、平成25年度完成予定の大分県の顔となる「緑の都市軸」に隣接する素晴らしい環境と、新築された当院の美しい外観をまとい、セント・ルカ産婦人科は最高の成人式を迎えようとしています。

20年前、下郡工業団地に通じる大通り沿いの目立つ場所に、突然なにやら建築が始まり、灰色の外壁にとても美しいピンクのタイルが貼られはじめ、一通行人でしかなかった私は、一体何ができるのか？と、前を通る度にわくわくしていました。緑燃える美しい時期に病院玄関前には大きな花が飾られ、とうとう完成したのだとスタッフでもないのに、嬉しく感じていました。それがセント・ルカ産婦人科と私の出会いです。出会って20年、運命的に仲間に入れてもらって12年が経ち、成人式に立ち会える事を幸せに思っています。これからは、30歳になったセント・ルカ産婦人科を想像し楽しみにして、共に歩いて行けるよう頑張りたいと思います。

開院20周年を迎えて

厨房より

主 任
矢野　千恵美

2011年7月、セント・ルカ産婦人科が大分駅南口（上野の森口）に移転してから初めての春を迎えました。今年の春は、とてもゆっくりとした足どりでやって来ました。

最近では大分駅も高架になり、周辺道路も整備され、セント・ルカ産婦人科が大分駅の大開発の波の中に飛び込んだのを実感しています。

さて、ルカも今年で20歳、祝成人です。

私が入社して12年になりますが、先輩からのたくさんの教えが土台となり、院長、事務長をはじめ、患者さんの声、スタッフの意見などを聞かせてもらいながら試行錯誤し、長い時間をかけ今の厨房に至っています。

この20年間、多くの患者さんにいろいろなドラマがあったと思います。その日々の中で、一瞬でも私たちの作った食事でホッとしていただいたり、心穏やかに過ごしてもらえた時間があったのなら幸いです。

上野の森口にセント・ルカ産婦人科ありという新時代へ向け、私たち厨房も歩みを止めず、遅れをとらぬよう邁進していかなければと思います。

開院20周年を迎えて

事務長より

事務長
宇津宮　富美子

セント・ルカ20周年記念ありがとうございます。
そして、おめでとうございます。

私は、わがままな院長の下、20年間セント・ルカの裏方で働いてまいりました。

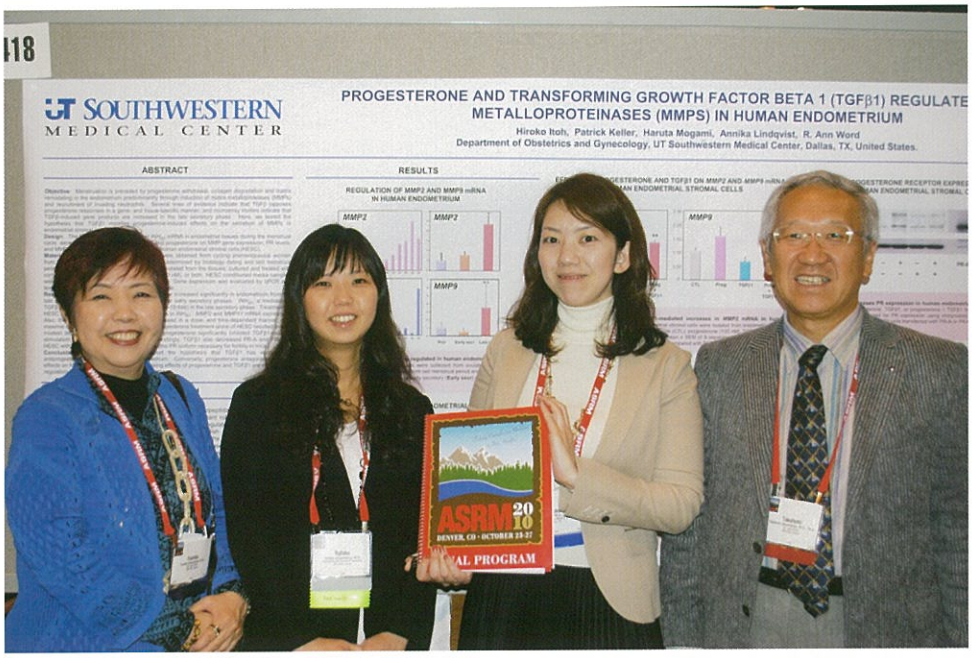
特に20年前の開業のとき（1年後に皆様から聞いたことですが、分娩を扱わない産婦人科なんて、すぐつぶれるだろうという意見があったそうですが）、そんな事などつゆ知らずについてまいりました。

しかし、時代の要求とは不思議なもので、この130万人大分県民にとって、その一割に関するといわれる赤ちゃんがほしい皆様に一定の貢献できるクリニックを運営するという一翼を担うことができて、大変光栄に存じます。

院長の思い込みもさることながら、職員の皆様方、その理念を理解し受け入れ、そして支えて下さった方々のお心に、本当に心から感謝したいと思います。

ようやく、最初の借り入れが終りに近づいた時、もう一度飛躍したいという院長の思いに、初めは驚くばかりでしたが、新たにこの地で働く喜びを頂きました。

皆様に支えられまいりましたが、これからも一歩一歩前に進んでまいります。どうぞ皆様方の暖かいご支援、よろしくお願い致します。



第66回アメリカ生殖医学会（2010年・デンバー）

サン・ピエトロ大聖堂・ピエタ（バチカン市国）